

子宮内膜症と各種疾患(3)

子宮内膜症・子宮腺筋症と周産期異常

小谷 友美／牛田 貴文

Summary

近年、子宮内膜症・子宮腺筋症罹患女性において、妊娠中期以降の周産期合併症(流・早産、前置胎盤、胎児発育不全、妊娠高血圧腎症など)の発症リスクが増加することが明らかとなってきた。また、腹腔内出血などの稀ではあるが重篤な合併症についても知られるようになってきている。今後は、重症度、病型、治療歴などにより疾患を細分化して予後を示す必要があり、周産期合併症を惹起する機序を解明していくことが期待される。

Key words

流産
早産
前置胎盤
胎児発育不全
胎盤形成

Tomomi Kotani

名古屋大学医学部附属病院総合周産期母子医療センター
准教授

Takafumi Ushida

名古屋大学医学部附属病院総合周産期母子医療センター
助教

はじめに

一般女性の子宮内膜症・子宮腺筋症の罹患率が10%程度に対し、不妊症女性においては、30～50%の罹患率ともいわれている。多くの既報告により、妊娠率、着床率などの生殖補助医療の治療成績への影響は明確である。一方、周産期合併症への関連を検討した研究がはじまったのは比較的最近である。1980年代より報告されるようになった流産リスクへの影響に関しては、現在エビデンスが確立しつつあるが、産科医にとって関心の高い、妊娠中期以降に発症する周産期合併症の発症リスクについての知識の集積はまだまだ十分とはいえない。各研究をみても評価項目が研究ごとに異なっており、結果についても一致しているわけではない。最近のシステマティック・レビューなどを紹介しながら、コンセンサスが得られつつある部分と今後明らかにすべき課題について述べたい。

システマティック・レビューによる評価

最近のHortonらのシステマティック・レビューに基づいたメタ解析¹⁾では、生殖、産科、新生児予後への影響について、これまでのレビューのなかでも最大規模の研究報告が詳細にレビューされている。

レビューには、わが国からの報告もいくつか含まれている。妊娠率、着床率などの生殖補助医療の治療成績は割愛するが、同解析でリスクが有意